

# 畜産年表

2017年

(一社) 岡山県畜産協会

# 発刊のことば

現在、国内景気は回復基調にあると言われておりますが、中山間地域では依然として過疎化及び高齢化が進行し、集落機能の低下や耕作放棄地の増加、森林の荒廃など農山村の活力低下は否めません。こうした中であって本県の畜産は、県内の農業粗生産額の三割強を占める地域の主要産業として今に在ります。これは申し上げるまでもなく、多くの先覚者並びに先輩諸兄による困難と試練で今日まで繋がれたからこそと、この間の尊いご苦勞に改めて深く敬意を表して感謝申し上げる次第であります。

今や、健康で安全に安心して暮らせる社会の実現が強く求められており、畜産の分野でも時代の要請に沿った安全な畜産物の安定生産で社会の期待に応える必要があります。このため、如何なる状況下に置かれようとも地域の一角に確実に根付いて地域に活力を産む産業として引き続き関係者が力を合わせて頑張らねばなりません。

かつての畜産会など、畜産三団体の統合で平成15年春に現在の畜産協会を発足させて15年を迎えました。これを期に、平成期に移行して後、本県畜産の発展に貢献された多くの先人の徳を讃えて様々な出来事とあわせて記し、この先、些かでも本県畜産の歩みの参考になればとの思いを込めて本史を発刊させていただきます。

この史が、「岡山県畜産史」ならびに昭和期までの「畜産年表」と同様に活用されることを願ってやみません。

発刊に際し、貴重な資料提供を頂いた亡き浅羽昌次氏のご遺族、そして編集委員としてご協力頂いた皆様に心からお礼を申し上げます。

平成29年3月

一般社団法人 岡山県畜産協会

代表理事会長 樋口 義 男

# 畜産年表

(平成元年～27年編)

## 凡 例 等

- 1 紙面の左面に岡山県内の畜産関係事項、右面に国内外の畜産関係事項を記載した。
- 2 定例的に開催された共進会等については、区切りの記念大会などのみ記載した。
- 3 文中の敬称は省略した。
- 4 畜産関係以外の事項についても、特異な事は記載した。
- 5 文中、次のように略称を使った箇所がある。

農 協：農業協同組合

経済連：岡山県経済農業協同組合連合会

全 農：全国農業協同組合連合会

酪 連：岡山県酪農農業協同組合連合会

おか酪：おかやま酪農業協同組合

ホクラク農協：ホクラク農業協同組合

全酪連：全国酪農農業協同組合連合会

中販連：中国生乳販売農業協同組合連合会

蒜 酪：蒜山酪農農業協同組合

農 済：岡山県農業共済組合連合会

畜産センター：岡山県総合畜産センター

畜産研究所：岡山県農林水産総合センター畜産研究所

家 保：家畜保健衛生所

食肉市場：岡山県営食肉地方卸売市場

酪 大：(公財)中国四国酪農大学校

衛指協：(社)岡山県家畜畜産物衛生指導協会

肉畜基金：(社)岡山県肉畜価格安定基金協会

配飼協：(一社)岡山県配合飼料価格安定基金協会

畜産協会：(一社)岡山県畜産協会

<p>平成 元年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 酪連は創立30周年記念式を岡山市で挙行 農政局長外300名の関係者が出席 (2月28日)</li> <li>* 酪連は中央酪農会議からの配分を受けて 県下の組合などに向こう三カ年間の生乳 出荷目標数量を割り当てた。(3月) 元年度 186,379トン(前年比+4.42%) 2年度 188,725トン( 〃 +1.3%) 3年度 192,000トン( 〃 +1.7%)</li> <li>* ホクラク農協は食肉部門を新会社「ホク ラクミート株式会社」に移行した。(3月)</li> <li>* 岡山県畜産センター開設 (4月1日) 県の養鶏、酪農、和牛(種雄牛部門)の 試験場機能を統合し、県公共育成セン ター、畜産経営環境技術センター、農業 大学校旭分校、普及園芸課旭地方専技室 も併設した。 和牛試験場は一部機能を残し大佐支所と なった。 場 所：久米郡旭町北2272番地 総面積 119ha(建物用地17.4ha 草地28.8ha 飼料畑14.3ha その他58.2ha) 総事業費 約85億円</li> <li>* 蒜酪は八束村農協から乳牛育成牧場の譲 渡を受けた。(6月6日) 年度内にジャージー牛36頭も払い下げ。</li> <li>* 真庭地区公社営畜産基地建設事業で蒜酪 の乳製品製造施設が完成。(10月) 公募で「蒜山ジャージーランド」とした。</li> <li>* 岡山県産牛肉銘柄推進協議会を設立 指定産地で生産された一定規格以上を 「おかやま和牛肉」の商標で全国展開す るため県、経済連、県肉連、食肉荷受組 合などで設立した。会長は田中昭経済連 専務</li> <li>* おかやま地どりの民間供給開始</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 昭和天皇のご崩御により元号は平成と なった。(昭和64年1月7日)</li> <li>* 中央酪農会議は年度ごとの生乳需給計 画を改め、向こう三カ年の出荷数量を 割り当てることとした。</li> <li>* 消費税3%導入</li> <li>* 悪臭防止法が改正され、畜産に關係の 深い低級脂肪酸4成分が指定された。</li> </ul>
------------------	---	--

<p>平成 2年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 岡山市農業共済組合設立</li> <li>* 牛削蹄師免許講習会を開始（酪大）</li> <li>* 畜産センターで黒豚の生産開始（5月） 県は人気の高い黒豚（バークシャー種）の特産化を目指して鹿児島県から6頭（雌4頭、雄2頭）を導入し、種豚の生産を開始した。</li> <li>* 畜産センターに最初の海外研修生として ブラジルサンパウロ市の日系二世獣医師 佐野浩マウロさん29才を迎えた。受精卵移植など一連の技術を1年間学んだ。 (5月)</li> <li>* 酪農ヘルパー要員確保に奨学金制度開始 ヘルパー制度の充実を望む声に応え、県酪連は奨学金制度を設けた。国のヘルパー体制整備基金と併せて養成確保に向かった。</li> <li>* 県酪農青年研究発表大会開催 酪農振興の情報交換や交流、技術研究などを行う若手酪農家による県酪農青年研究連盟（道上正寿会長、会員276名）は牛乳の消費拡大、環境美化の推進など推進目標を定め、若い女性を招いての「デイリーヤンガーの集い」の開催などを決めた。</li> <li>* 高齢者のおかやま地どり振興事業を開始 県は60才以上の高齢者組織を中心に、放し飼いによる高品質の鶏卵や地どり肉の生産で養鶏振興を図ることとした。</li> <li>* 県産和牛肉の香港輸出を開始（12月12日） 平成3年の牛肉自由化を見据え、経済連が華林（ウイリング）貿易有限公司にトーマン鹿児島出張所経由でミートセンター加工のロース部分肉30kgの出発式を行った。</li> <li>* 福田林氏（岡山県家畜商業協同組合連合会長）が叙勲（勲五瑞宝章）（12月）</li> <li>* 平成3年からの牛肉輸入自由化を受け、乳用雄子牛価格が10万円以下に下落した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 第9回全日本ホルスタイン共進会を熊本県合志町で開催（11月22～26日）</li> <li>* (社)酪農ヘルパー全国協会設立（12月）</li> <li>* 湾岸戦争勃発</li> </ul>
------------------	--	--

<p>平成 3年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 4月からの牛肉輸入自由化を控えて岡山県肉用牛振興大会が津山文化センターで開催された。500人が参加 (2月14日)</li> <li>* 畜産センター大佐支所を閉鎖して本所に統合 (3月31日)</li> <li>* 畜産センターは受精卵産子での種雄牛造成及び受精卵のクローン技術研究に着手 また「赤木1」号が基幹種雄牛に認定された。</li> <li>* 加茂川町で山地酪農を営む吉田全作牧場が米国からブラウンスイス種を導入。カマンベールとラクレットの本格製造に入った。</li> <li>* 畜産センター敷地内に「まきばの館」が完成し、オープン記念式典を挙行。 (4月26日) 総面積約5ha 総工費約13億円</li> <li>* まきばの館で中国5県畜産物フェアを開催 (主催：畜産振興事業団) (10月)</li> <li>* 岡山家保と家畜病性鑑定所が御津町に移転 (10月) 敷地10,600㎡ 総工費約7億8千万円</li> <li>* 美甘村和牛共励組合が農林漁業近代化表彰を受賞 (11月)</li> <li>* 初岡太郎氏 (株初岡ふ卵場社長) が叙勲 (勲五瑞宝章) (12月)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 牛肉の輸入自由化開始 (4月)</li> <li>* 雲仙普賢岳噴火で大火砕流(6月3日)</li> <li>* 農林水産省は家畜伝染病予防法施行40周年記念式典を開催し、岡山県から次の関係者が表彰された。 (12月) 農林水産大臣表彰：花房 猛 畜産局長表彰：大野敦生 日本獣医師会長表彰： 岡本孝哉、守屋 進 田中欣一、横山成美</li> </ul>
------------------	---	--

<p>平成 4年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 県は畜産センターに加工用のブラウンスイス種2頭を米国から導入 (2月)</li> <li>* 県産鶏卵鶏肉の消費拡大を目的とした第1回「こっちゃんフェア」が天満屋岡山店アリスの広場で開催された。(主催：県養鶏協会) (3月21日)</li> <li>* 畜産センターの2期工事(和牛繁殖部門畜舎、シバ草地造成)が完了し、大佐支所を閉鎖した。</li> <li>* 畜産センターは受精卵の雌雄判別技術の研究に着手 (4月)</li> <li>* 畜産センターの「第27石原」号が基幹種雄牛に認定</li> <li>* 農済真庭家畜診療所にレントゲン撮影機(ファイバースコープ)を導入</li> <li>* 経済連は高梁市の種豚増殖センターを閉鎖</li> <li>* 農家間で高能力牛(乳量1万kg以上のスーパーカウ)の制度導入が進んだ。(平成3年：15頭、4年：18頭)</li> <li>* 県は鶏卵価格の異常低落への緊急措置として単県利子補給を行う「緊急養鶏農家経営再建資金、融資枠18億円」を9月議会で措置した。</li> <li>* 第6回全国和牛能力共進会が開催され岡山県から17頭を出品</li> <li>* 牛肉輸入自由化の影響で酪農経営が悪化輸入肉と質的に競合する乳用牛肉価格に連動して乳用雄子牛価格が下落した。</li> <li>* 池内豊氏(元旭東酪農業協同組合長)が黄綬褒章を受章 (11月)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 岡山県は4月から週休二日制を導入</li> <li>* 第6回全国和牛能力共進会が大分県湯布院で開催 (10月1～5日)</li> <li>* 食鳥検査制度がスタート</li> </ul>
------------------	---	---



<p>平成 5年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 畜産センターはBLUP法アニマルモデルによる和牛の第1回育種価を評価、公表した。(3月)</li> <li>* 富村は和牛地域内一貫生産を目指し、財団法人畜産公社を事業主体に団体営草地開発整備事業で草地など40ha、育成舎、繁殖舎などを整備した。</li> </ul> <p>工期 平成元年～4年 工事費 約5億3千万円</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* まきばの館でミルクフェアが開催され、1万人の参加者が楽しんだ。(8月22日)</li> <li>* 田中昭氏(元岡山県経済農業協同組合会長)が黄綬褒章を受章(11月)</li> <li>* 県は畜産センターに米国からホルスタイン種の超高能力牛(通称:ウルトラスーパーカウ、乳量1万8千kg以上)5頭を中四国で初めて導入。受精卵移植に活用して乳用牛のレベルアップを図った。(12月)</li> <li>* 県は和牛の肉質改良を目指し、全国和牛登録協会の協力を得て「利幸土井」号精液を利用した種雄牛造成に着手した。</li> <li>* 畜産センターは豚の液状精液の実用的保存及び輸送法の検討に着手</li> <li>* 生乳の計画生産で、6年までの減産計画に入った。</li> <li>* 鶏卵が市場最安値 M規格110円/kg</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 国は生乳過剰対策として乳用雌牛2万頭の食肉処理を発表(4月22日)</li> <li>* 気象庁が冷夏を発表(昭和29年以来の記録)</li> <li>* ガットウルグアイラウンド合意</li> <li>* 凶作により米を緊急輸入</li> </ul>
------------------	---	---

<p>平成 6年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 岡山県ブロイラー(株)が県内及び関西地区に「岡山桃太郎地どり」の出荷を開始 (1月)</li> <li>* 坂本晃章氏(瀬戸内酪農業協同組合長)が叙勲(勲五瑞宝章) (4月)</li> <li>* 酪大第2牧場に西日本初の自動搾乳施設(オートタンデム型パーラー)が完成した。</li> <li>* 梅雨明けの記録的猛暑、少雨で甚大な家畜被害が発生 10日連続で35℃超え、県南は深刻な水不足に陥った。鶏豚牛の死亡被害が続出 (7月)</li> <li>* 岡山県と北海道の和牛交流事業として「おかほく黒べこサミット」を北海道七飯町大沼地域で開催 (8月)</li> <li>* 第50回記念岡山県畜産共進会が経済連総合家畜市場で開催 (10月)</li> <li>* 農済の家畜臨床研修所が津山市に移転</li> <li>* 津山家畜診療所に多要素心音計、レントゲン撮影器、血液自動分析器を格納した家畜診療検診車を導入した。</li> <li>* 県は畜産センターに米国から超高能力ホルスタイン種5頭を導入。超高能力牛受精卵の有償譲渡も開始した。</li> <li>* 畜産センターは食肉市場に出荷される牛全頭の枝肉成績収集を開始。成績は育種価に反映された。</li> <li>* 畜産センターは試験的に豚液状精液の供給を開始</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 安い輸入牛肉に押されて国産の豚肉価格が異常低落</li> <li>* 特定水道利水障害防止のため水道水源水域の水質の保全に関する特別措置法施行(トリハロメタン)</li> </ul>
------------------	---	--

<p>平成 7年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 第11回全日本ホルスタイン共進会の岡山県開催が決定 (3月)</li> <li>* 超高能力牛の雌雄判別雌卵移植による雌子牛誕生 (3月)</li> <li>* 高梁家保が高梁市高倉に移転 (4月)</li> <li>* 吉原太郎氏 (ホクラク農業協同組合長) が叙勲(勲五瑞宝章) (4月)</li> <li>* 酪連の渡辺明喜会長が退任、後任は山崎博文ホクラク農協組合長</li> <li>* 米国産超高能力牛の凍結受精卵移植第1号が笠岡市で出産 (10月)</li> <li>* 畜産センターの「第2富藤」「藤花」号が基幹種雄牛に認定</li> <li>* 三宅明氏 (元浅口酪農業協同組合長) が黄綬褒章を受章 (遺族追賞) (11月)</li> <li>* 酪大が南オーストラリア州立オンカパリンガ専門学院ビクターハーバー校と姉妹縁組み (11月)</li> <li>* 蒜山地区ジャージー導入40周年及び酪大創立30周年記念式典に長野士郎岡山県知事外400名が出席 (11月)</li> <li>* 第10回全日本ホルスタイン共進会で県勢は過去最高の成績</li> <li>* 農済は岡山南部家畜診療所にレントゲン撮影器、津山家畜診療所に眼底検査装置を導入</li> <li>* 県は畜産センターに米国から超高能力ホルスタイン種3頭を導入</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 阪神淡路大震災 (1月17日) マグニチュード7.3 死者約5万4千人</li> <li>* 第10回全日本ホルスタイン共進会が千葉市で開催 (11月23~26日)</li> <li>* 悪臭防止法の改正 臭気指数規制を導入</li> </ul>
------------------	---	--

<p>平成 8年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 畜産センターの「新高平」「菊藤」号が基幹種雄牛に認定</li> <li>* 畜産センターは超高能力ホルスタイン種の受精卵供給を開始 供給価格は能力により3～5万円/個で性判別卵は18,000円加算 (4月)</li> <li>* 今岡正一氏（養鶏協会副会長）が叙勲（勲六旭日） (4月)</li> <li>* 畜産センターで烏骨鶏の特産化開始 (9月)</li> <li>* 和牛の育種価判明率が全国1位</li> <li>* 蒜酪の農村資源活用農業構造改善事業によるビジターセンターが完成し、竣工式を挙行了。 (10月)</li> <li>* 県は畜産センターに米国から超高能力ホルスタイン種3頭を導入 (11月)</li> <li>* 坂本勉氏（養鶏協会副会長）が叙勲（勲六単光旭日） (11月)</li> <li>* 井上唯夫氏（岡山県家畜商業協同組合連合会長）が黄綬褒章を受章 (11月)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* B S E（牛海綿状脳症）が英国で発生 英国政府が人への感染可能性を認め、パニックが世界に拡大した。 (3月)</li> <li>* 英国政府がB S E感染の大きい2才以上牛処分など、28億円の対策を発表 (4月)</li> <li>* 農水省が豚肉のセーフガード発動を決定 7月から450円/kgの基準輸入最低価格が557円/kgになった。 (6月)</li> <li>* 世界初の体細胞クローン羊「ドリー」が誕生 (7月)</li> <li>* 病原性大腸菌O-157による食中毒が全国で発生 岡山県では邑久町の幼稚園、小学校で死者が出た。</li> <li>* 円高が進み、1ドル80円</li> <li>* 岡山県に石井正弘知事誕生 (11月)</li> </ul>
------------------	--	---

<p>平成 9年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 瀬戸内酪農協が明治乳業岡山工場と共同で平成8年12月にブランド化して販売を始めた笠岡湾干拓地「べいふあーむ牛乳」が順調な売れ行きを示した。</li> <li>* 美作酪農協（津山市）が50年の歴史を閉じ、津山鶴山ホテルで解散式を挙行了。（3月）</li> <li>* 県は「おかやま黒豚」の産地化に向けて英国からパークシャー種豚6頭（雌4頭、雄2頭）を畜産センターに導入（3月）</li> <li>* 津山家保新庁舎が津山市草加部に移転（3月）</li> <li>* 東備、倉敷地区、真庭、勝英農業共済組合を設立</li> <li>* 畜産センターは新たに精液供給用豚舎を整備して豚液状精液の供給を開始 パークシャー種の精液及び種豚の供給が急増した。</li> <li>* 畜産センターは牛の経膈採卵技術の研究に着手（4月）</li> <li>* 平成12年に岡山県で開催される「第11回全日本ホルスタイン共進会実行委員会（会長：石井知事）を設立（5月）</li> <li>* 津山市久米に堆肥化施設「有機の丘」と製品堆肥の実証展示施設が畜産環境整備特別対策事業で完成</li> <li>* 畜産センターの「西勝」「稔糸茂」「武藤21」号が基幹種雄牛に認定 「武藤21」号は受精卵産子で初の認定</li> <li>* 畜産センターは和牛の産肉能力検定を間接法から現場後代検定法に移行</li> <li>* 池内豊氏（元旭東酪農業協同組合長）が叙勲（勲五瑞宝章）（11月）</li> <li>* 県は畜産センターに米国から超高能力ホルスタイン種3頭を導入（11月）</li> <li>* 第7回全国和牛能力共進会の成績は、種牛の部で健闘したが肉牛の部で上位入賞が得られなかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 農水省は口蹄疫が発生した台湾産偶蹄類の肉などの輸入を禁止（3月）</li> <li>* 家畜伝染病予防法が改正され伝染性海綿状脳症などを伝染性疾病に追加（4月）</li> <li>* 第7回全国和牛能力共進会が岩手県で開催（9月11～15日）</li> <li>* 日本畜産学会関西支部大会が岡山市で開催（9月）</li> <li>* 香港政庁は新型インフルエンザの人への感染が強まったことを受け、鶏の大量処分を始めた。（11月）</li> <li>* 消費税5%を導入</li> <li>* 倉敷チボリ公園開園</li> <li>* 牛のイバラギ病が九州で多発</li> <li>* 第3回気候変動枠組条約締結国会議（COP3）京都会議・京都議定書</li> </ul>
------------------	--	---

<p>平成 10年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 県は英国からパークシャー種豚5頭（雌3頭、雄2頭）を畜産センターに導入（3月）</li> <li>* 県酪乳業株式会社を解散（3月31日）</li> <li>* 日野田守男氏（元岡山県家畜商業協同組合連合会長）が黄綬褒章を受章（4月）</li> <li>* 農済は家畜部及び診療課を設置</li> <li>* 農済は岡山市農済を拡大して岡山地区農業共済組合に、井原地区農済事務組合を拡して井笠地区農業共済事務組合と名称変更したほか、高上川及び津山地区農済事務組合を設立した。</li> <li>* 県食肉公正取引協議会（谷本明久会長）設立15周年祝賀会（4月18日）</li> <li>* 笠岡市でイバラギ病が発生し2頭死亡 昭和44年以来の県内発生（8月）</li> <li>* 第11回全日本ホルスタイン共進会場を瀬崎町の「おかやまファーマーズマーケット」及び隣接の総合公園予定地に決定（8月）</li> <li>* 岡山県畜産会（池田隆政会長）は「岡山畜産便り」の創刊500号記念誌を発刊</li> <li>* 日本草地学会を岡山県で開催（8月） 研究発表：岡山大学、現地検討：蒜山</li> <li>* 農政局と中央畜産会の共催で畜産交流会を蒜山ジャージーランドで開催（9月）</li> <li>* 畜産センターで受精卵クローン子牛が誕生したが、超過大児で死産となった。（10月）</li> <li>* 畜産センターは豚凍結精液の実用化試験に着手（平成10～14年度）</li> <li>* 台風10号の直撃で吉井川水系を中心に甚大な被害が発生 津山市金屋の石岡牧場の肉用牛30数頭が溺死したが、瀬戸内海黄島に流れ着いた1頭の子牛が奇跡的に生還し、後におかやまファーマーズマーケットノースビレッジに引き取られ「元気君」の愛称で長く可愛がられた。（10月）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 香港からの鶏肉輸入を再開（2月7日）</li> <li>* 石川県で国内初の体細胞クローン牛誕生</li> <li>* マレーシアでニパウイルス感染症が発生 豚から人への感染で100人が死亡し、軍隊による機銃掃射などで約100万頭の豚が殺処分された。</li> </ul>
-------------------	---	---

<p>平成 10年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 県は外郭団体の見直しで、岡山県畜産公社の桜野牧場と哲多肉用牛センターの廃止を発表 (10月)</li> <li>* 荒木照文氏 (岡山県配合飼料価格安定基金協会理事長) が叙勲 (勲五瑞宝章) (11月)</li> <li>* 経済連が香港で第2回おかやま畜産物フェアを開催 (11月12~22日)</li> <li>* 岡山市足守に県下初の酪農家のアイスクリーム工房がオープン (安富牧場)</li> </ul>	
-------------------	--	--

<p>平成 11年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 県は英国からパークシャー種豚6頭 (雌4頭、雄2頭) を畜産センターに導入 (3月)</li> <li>* 美星町農協に食肉加工場が完成 (4月) 鉄骨平屋約520㎡ 工事費約25,600万円</li> <li>* 県農業総合センターが完成し、農業試験場、農業大学校、農業改良普及所を統括 (4月)</li> <li>* 農業共済制度改正で新たな事故除外方式が導入され、火災・法定家畜伝染病などを除く死産事故が対象から除外された。</li> <li>* 全国に先駆けて豚コレラ予防注射を中止</li> <li>* 酪連が緊急増産対策として県の措置した生乳増産緊急対策事業により、2年間で1,600頭の増頭に取り組んだ。 (6月)</li> <li>* 奈義町農協が和牛500頭規模の繁殖センターを設置 (7月) 敷地2ha 工事費約25,600万円</li> <li>* 雪印乳業が年度末での津山工場廃止を発表</li> <li>* 県は和牛改良増殖対策要綱・要領を改正し、育種価要件を種牛の選抜基準に採用した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 家畜排せつ物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律が施行 (11月1日)</li> <li>* 食料・農業・農村基本法が成立</li> </ul>
-------------------	--	---

<p>平成 12年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* ホクラク生乳集出荷施設「クーラーステーション」、酪連「生乳検査センター」が美作地区公社営畜産基地建設事業により総事業費約16億6千万円で鏡野町に完成し、4月1日から稼動した。(1月)</li> <li>* ブラウンスイス種の産地化を進めている加茂川町が新たに4頭を導入し、町営育成牧場に繋養した。(1月)</li> <li>* 畜産センターで県内初の受精卵クローン技術による和牛子牛が誕生(1月31日)</li> <li>* 畜産センターの「藤姫丸」号が基幹種雄牛に認定(2月)</li> <li>* おかやま黒豚銘柄推進協議会が設立(2月10日)</li> <li>* 畜産センターで県内初の体細胞クローン技術によるホルスタイン種子牛2頭が誕生(3月6日)</li> <li>* 3月25日の宮崎県での口蹄疫発生を受け、岡山県では翌26日から家保が直ちに県内全農家に立ち入り、消毒など衛生対策、早期通報などの指導を徹底して警戒体制をとった。</li> <li>* 雪印乳業は7月12日から倉敷など21工場の操業を停止。生産量の約47%を出荷していた岡山県では配乳調整に追われた。</li> <li>* 岡山市内の売り場からチーズなども含め全ての雪印製品が消え、8月5日に倉敷工場が再開するも注文は事件前の2割程度であった。</li> <li>* 大阪市は雪印乳業による食中毒発症者数を14,849人と発表(9月8日)</li> <li>* 第11回全日本ホルスタイン共進会及び第3回全日本ジャージー共進会が66万人の入場者を集めて開催された。 会期：11月2～5日 会場：灘崎町のファーマーズマーケット</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 3月末から4月にかけて韓国で1936年(昭和16年)以来の口蹄疫発生が確認された。</li> <li>* 宮崎県宮崎市の肉用牛農家で口蹄疫発生し(3月25日)、続いて同県高岡町の肉用牛農家でも確認された。 (4月3日)</li> <li>* 北海道本別町の肉用牛に口蹄疫が確認</li> <li>* 国内での過去の口蹄疫発生例は明治34～38年に年平均233頭、同41年に579頭の牛に発生記録があり(県内は41年中和村で3頭)、その後は昭和8年に門司検疫所で243頭、昭和16年に岡山県に入った釜山からの検疫解放牛で真性2頭と疑似2頭の報告があった。</li> <li>* 雪印乳業集団食中毒事件発生 大阪工場の低脂肪乳から黄色ブドウ球菌によるエンテロトキシンが検出され、近畿以西8府県で下痢原因と特定された。 (7月2日)</li> <li>* 第11回全日本ホルスタイン共進会、第3回全日本ジャージー共進会が岡山県で開催され、全国44都道府県からホルスタイン300頭、ジャージー牛60頭が出品された。</li> <li>* 天皇、皇后両陛下が地方事情視察に来県</li> </ul>
-------------------	--	---





<p>平成 13年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全農家に症状を示すチラシを配布し、 疑いがある場合の緊急連絡を徹底</li> <li>・12日から大規模農家の立入検査を開始</li> <li>・肉骨粉などの飼料配合の禁止を指導</li> </ul> <p>* 県内の学校給食で牛肉の使用中止が相次いだ。</p> <p>県畜産課は風評被害を防ぐため、県産牛の安全確認文書で教育委員会などに冷静な対応を求めた。 (9月26日)</p> <p>* 県が「岡山県牛海綿状脳症 (B S E) 対策会議」を設置して初会合 (10月1日) 県民に最新情報を提供して風評被害の防止に努めることを申し合わせた。</p> <p>山口副知事を長に、生活環境、農林水産、保健福祉の各部長、岡山・倉敷市保健福祉局長ら15人で構成</p> <p>* 北海道のB S E発生農家からの導入牛2頭を殺処分 (井笠及び真庭家保管内で各1頭)</p> <p>* B S Eの発生を受けて牛肉消費が止まり、県内のと畜場はB S Eの全頭検査が開始されるまで牛の解体処理を中止した。</p> <p>B S E検査開始：10月18日</p>	<p>* 米国ニューヨークで同時爆破テロが発生 (9月11日)</p>
-------------------	--	-------------------------------------

<p>平成 14年</p>	<p>* 食肉市場の基幹処理棟が完成 (3月18日) O-157やB S E対策に対応した衛生面や臭気、景観など環境面に配慮した市場として4月から操業を開始した。</p> <p>I期工事：と畜解体及び冷蔵庫施設など事業費約52億円</p> <p>* 畜産センターでの特産家畜の維持供給事業を廃止 (3月31日)</p>	<p>* 輸入牛肉を国産牛肉の箱に詰め替えるB S E未検査牛肉買い取り制度の悪用など、食肉の偽装表示が続出した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・雪印食品関西ミートで豪州肉を国産牛表示箱に詰め替えた偽装が発覚 (1月)</li> <li>・岡山市の食品会社がカレー用牛肉で米国産を広島県産と表示した偽装が発覚 (3月)</li> </ul>
-------------------	---	---

<p>平成 14年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* ホクラク農協、旭東酪農協、水島酪農農協、瀬戸内酪農協の合併で「おかやま酪農業協同組合」が発足し、記念式典が開催された。 (4月1日)</li> <li>びほく農協、美星農協など総合農協所属農家も加入して組合員農家数602戸、年間生産見込み130千トン、職員数113名(内ヘルパー24名)となった。</li> <li>従来の酪連は一切の業務を新農協に引き継ぎ、法的手続き完了後に解散した。</li> <li>* 鈴木茂男氏(岡山県養蜂組合連合会長)が黄綬褒章を受章 (4月)</li> <li>* 井原市でニューカッスル病発生 採卵鶏94,200羽の内20,000羽が死亡 県内発生は14年ぶり (5月13日)</li> <li>* 井原市で再びニューカッスル病発生 (9月)</li> <li>肉用鶏約12,000羽の内1,248羽が死亡した。</li> <li>* 第8回全国和牛能力共進会開催 種牛の部で多くが優等入賞を果たし、肉牛の部では全頭が優等賞と素晴らしい成績を収めた。</li> <li>* 雪印乳業倉敷工場が閉鎖 雪印乳業は子会社である雪印食品の牛肉偽装問題などを受け、新たに牛乳部門を切り離して全農や全酪連との共同出資会社メグミルクを設立することとし、9月30日で倉敷工場を閉鎖し、業務は神戸工場に移管した。</li> <li>* 若山梧郎氏(元蒜山酪農農業協同組合長)が黄綬褒章を受章 (11月)</li> <li>* 岡山県畜産会が特定JAS(日本農林規格)の登録認定機関として農林水産省の認可を受け、加茂川町せんたろう公社の「おかやま地どり」を認定した。 (11月)</li> <li>* 畜産センターに低コスト畜舎排水処理施設を設置</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 国内で次々とBSE感染牛が確認 4頭目(北海道音別町 5月) 5頭目(神奈川県伊勢原市 8月)</li> <li>* 牛海綿状脳症対策特別措置法が制定 (6月)</li> <li>* 家畜共済の廃用事故にBSEを追加</li> <li>* 第8回全国和牛能力共進会が岐阜県で開催 (9月26~30日)</li> </ul>
-------------------	---	--

<p>平成 15年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 社団法人岡山県畜産協会が発足 (4月1日) 畜産会、肉畜基金、衛指協の3団体が統合して磨屋町の農業会館に事務所を置き、総務部、経営指導部、家畜衛生部、価格安定部、生乳検査部を設けた。 発足時の主要役職員 会長：池田隆政 副会長：本松允之 専務：内藤照章 事務局長：池田 勉</li> <li>* 乳牛の子牛及び胎児が家畜共済目的に追加され、死産共済金支払限度額の設定もなされた。</li> <li>* 死亡獣畜を取り扱う施設（奈義町の衛生センター、徳島化製など）に搬入する全ての死亡牛BSE検査を岡山家保で開始した。(7月)</li> <li>* 県は死亡牛の集荷採材保管施設を畜産センター敷地内に整備 家畜衛生管理センターとして岡山県畜産協会に管理委託し、BSE検査体制を整えた。検査は岡山家保が実施</li> <li>* 福山市でBSEが発生し、県内の関連農場で疑似患畜8頭が確認されたことを受け、県下の全5家保で殺処分と検査に対応した。</li> <li>* 雪印乳業倉敷工場跡地にタカナシ乳業の進出が決まり、6月から操業開始した。</li> <li>* 杉洋氏（ブロイラー協会会長）が叙勲（旭日単光章）(11月)</li> <li>* 森田一文氏（元おかやま酪農業協同組合理事）が黄綬褒章を受章 (11月)</li> <li>* 第12回全日本ホルスタイン共進会岡山県出品対策協議会が発足 (11月28日)</li> <li>* 畜産センターの「勝福茂」「沢茂勝」号が基幹種雄牛に認定</li> <li>* 畜産センターは「改良型おかやま地どり」を作出</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 国内でのBSE感染牛 6頭目（和歌山県粉河町 1月） 7頭目（北海道網走市 1月） 8頭目（茨城県南那須町 10月） 9頭目（広島県福山市 11月）</li> <li>* 死亡牛BSE全頭検査スタート (4月1日) BSE対策特別措置法に基づく措置で、24か月齢以上の死亡牛が対象となった。</li> <li>* カナダで初のBSE感染牛を確認 (5月20日)</li> <li>* 政府が冷蔵牛肉セーフガードを発令 8月1日から現行関税（38.5%）を年度末まで50%に引き上げた。</li> <li>* 北海道でスクレイピー（海綿状脳症）に感染した綿羊が確認（昭和59年に北海道で発見されて以来60頭目）</li> <li>* 米国初のBSE感染牛（輸入牛）を確認 (12月23日)</li> <li>* 米国産牛肉の輸入禁止 (12月)</li> <li>* 牛の個体識別のための情報の管理及び伝達に関する特別措置法（牛トレーサビリティ法）施行 (12月1日)</li> </ul>
-------------------	--	---

<p>平成 16年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 岡山県は山口県での高病原性鳥インフルエンザ（以下「鳥インフルエンザ」）発生を受けて養鶏農家での異常の早期把握を関係機関を通じて徹底した。 (1月12日)</li> <li>* 県が鳥インフルエンザ研修会を開催 行政や養鶏、医療関係者など50名が出席 講師：川崎医科大学の大内正信教授</li> <li>* 浅田農産から出荷された廃鶏と同じ食鳥処理場（兵庫県）に出荷され、同居した県内農場の廃鶏から鳥インフルエンザ陽性反応が確認されたが、直ちに県内農場の立入り検査で異常がないことを確認 (2月)</li> <li>* 県は県北2カ所にある浅田農産船井農場の関連農場に立ち入り、異常のないことを確認した。 (2月28日)</li> <li>* 食肉市場の部分肉処理棟が完成（3月） カット施設、冷蔵施設など事業費：約18億円</li> <li>* 市町村合併を受け、高上川農済事務組合は高粱地域事務組合農済センターとして業務を開始した。</li> <li>* 井上唯夫氏（岡山県家畜商業協同組合連合会長）が叙勲（旭日双光章）（4月）</li> <li>* 県は「肉用牛振興プロジェクト会議」を設置し、繁殖雌牛を中心とした肉用牛振興戦略を立て振興策に乗り出した。 (6月25日)</li> </ul> <p>現況（16年） 総頭数33,213頭 内繁殖雌5,064頭</p> <p>計画（21年） 総頭数37,607頭 内繁殖雌5,567頭</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>* 畜産センターの「花茂勝2」号が基幹種雄牛に認定</li> <li>* 「利花」号及びその産子のDNAを調べ、脂肪交雑とロース芯面積に関連する優良遺伝子を特定した。 このDNAマーカーを利用したマーカーアシスト選抜による種雄牛の造成に着手した。</li> <li>* 畜産センターにメタン発酵処理施設を設置</li> <li>* 日本チャンキー(株)は本社を和気町から岡山市に移転</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 卵価の異常低迷で生産者は大打撃 (1月) 供給過剰と消費低迷で東京M中値151円/kgと平成年代の最安値が続いた。</li> <li>* 山口県で高病原性鳥インフルエンザ発生 血清型はH5N1 我が国では大正14年以来79年ぶり 阿東町の採卵農家に発生 (1月11日確定) 2月19日、山口県は終息宣言</li> <li>* 大分県のチャボ14羽飼育場で鳥インフルエンザが発生 (2月19日)</li> <li>* 京都府丹波町の浅田農産船井農場で鳥インフルエンザ陽性反応確認 (2月28日確定) 2月25日以後、約28千羽死亡するも腸炎との判断で15千羽の成鶏を処理場出荷するなど悪質な対応が社会問題となった。</li> <li>* 採卵鶏で「国の計画生産」が廃止 (4月27日) 昭和49年から実施していた羽数管理などの計画生産を廃止し、生産者の主体的判断に基づく生産に移行した。</li> <li>* 24か月齢以上の死亡牛のBSE検査を開始</li> </ul>
-------------------	---	--

<p>平成 17年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 新見市は千屋牛増産に向けて、発情や分娩情報をメールで知らせる「検知通報システム」の活用実験を開始した。 (2月16日)</li> <li>* 食肉市場内の岡山県食肉荷受(株)と(株)岡山県食肉センターが、ISO9001規格の認証を取得 (3月)</li> <li>* 県下の9地方振興局が改組されて3県民局(備前・備中・美作)、6支局(東備・井笠・高梁・新見・真庭・勝英)となった。 (4月1日)</li> <li>* 畜産センターの「第5北盛」号が基幹種雄牛に認定</li> <li>* 中部飼料水島工場が完成、本格稼働 動物性タンパクを含む豚鶏飼料を牛飼料とライン区分し、海岸通りに新設した。 (8月)</li> <li>* 石賀博和・恵子夫妻が天皇杯受賞 真庭市東茅部での休耕田活用などによる和牛繁殖経営が評価され、本県では26年ぶりの天皇杯受賞に至った。 (8月)</li> <li>* 第4回全日本ジャージー共進会で全部門を制覇し、美甘正平氏(真庭市)が最高位賞を獲得した。 (11月)</li> <li>* 岡山県開催の第60回国民体育大会馬術競技で県下の家保が馬事衛生を担当して良好な衛生環境を提供したことを受け、原田喜市選手が国体終了後も蒜山会場を競技の拠点として定住し、11年後のリオデジャネイロ五輪の代表となった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* カナダでBSE感染牛2頭を確認 (1月)</li> <li>* 国内初変異型ヤコブ病で男性死亡 患者はBSE感染が広がっていた1989年に1年間のイギリス滞在歴があった。 (2月)</li> <li>* BSE検査について、国は20か月齢以下の牛を検査対象から除外との緩和策を発表したが、全都道府県は全頭検査を継続とした。 (5月)</li> <li>* 第12回全日本ホルスタイン共進会及び第4回日本ジャージー共進会が栃木県で開催 (11月3～6日)</li> <li>* 米国産牛肉の輸入再開 BSEで2003年12月以来停止していた米国産牛肉の輸入について内閣府食品安全委員会が再開を容認する旨を農水省と厚労省に答申したことを受け、冷蔵牛肉など4.6トンが羽田に着いた。 (12月16日)</li> <li>* 全国で7頭のBSEを確認</li> <li>* 第60回国民体育大会夏・秋季大会が岡山県で開催され、馬術競技が真庭市蒜山の蒜山高原ライディングパークで行われた。</li> <li>* 鳥インフルエンザ(H5N2亜型)が茨城県で40例、埼玉県で1例発生。 弱毒タイプで、38農場336万羽の殺処分と8農場242万羽の自主淘汰が行われた。 (6～12月)</li> <li>* 平成17年度獣医学術中国地区学会が岡山市の岡山コンベンションセンターで開催 (10月9～10日)</li> </ul>
-------------------	---	--

<p>平成 18年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 蒜酪が畜産大賞優秀賞を受賞（2月） 六次化の実践による日本一のジャージー酪農産地の確立が評価された。</li> <li>* 岡山家保が家畜病性鑑定所を吸収して総勢19名の二課制となった。（4月1日）</li> <li>* 農業総合センター技術普及課旭分室が本課に統合（4月1日）</li> <li>* 津山市食肉処理センターで県内初（国内25頭目）のBSE感染牛を確認（4月19日）</li> <li>北海道産で平成14年に奈義町に導入された。</li> <li>* 久米郡美咲町が食育モデル事業として、全国初となる朝の学校給食での牛乳・乳製品の提供を実施した。</li> <li>* 畜産センターの「西花8」号が基幹種雄牛に認定 マーカーアシスト選抜により造成された初めての基幹種雄牛</li> <li>* 「おかやま黒豚」マカオへの輸出開始</li> <li>* 赤峰和男氏（人工授精師協会長）が黄綬褒章を受章（4月）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 米国産牛肉、再度輸入禁止 輸入肉の中にBSE病原体が蓄積しやすい特定危険部位の脊柱混入が確認され、再開1ヶ月で安全説は崩れた。（1月20日）</li> <li>* 米国産牛肉、輸入再開 政府は脊柱混入で禁止していた輸入を約半年ぶりに再開すると決定した。（7月27日）</li> <li>* 秋篠宮に長男誕生（9月）</li> <li>* 京都で狂犬病確認（11月16日） 60歳代の男性が8月にフィリピンで犬に手を噛まれ帰国後に発症し、17日に死亡した。 同時期、フィリピンから帰国した横浜の男性についても発症報告があった。</li> <li>* ポジティブリスト制度施行（5月）</li> <li>* 乳業大手3社が北海道にナチュラルチーズ工場を新增設</li> <li>* 全国で10頭のBSEを確認</li> <li>* BSEの発生がピークとなり世界で19万頭が確認された。</li> </ul>
-------------------	---	---

<p>平成 19年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 県は家保による県内209カ所の養鶏場への立入り調査を始め、消毒施設や防鳥ネットなどの確認を行った。（1月15日）</li> <li>* 高梁市川上町の採卵養鶏場で県内初の鳥インフルエンザ（H5N1型）が発生したが、発生農場からの早期報告、移動制限や飼育鶏全て（約12千羽）の殺処分など素早い対応で周辺農場への感染はなかった。 1月27日：22羽が死亡、簡易検査陽性 1月29日：感染ウイルスの確認 3月1日：10km圏内の移動制限解除と終息宣言</li> <li>県は、農家の早期通報で被害を最小限に</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 宮崎県清武町、日向市及び新富町で鳥インフルエンザ（毒性が強く致死率の高いH5N1型ウイルス）が発生（1月12日～2月1日）</li> <li>* 千葉県の船橋市立医療センターは、「昨年搬送され死亡した男性から、牛などで高熱など激しい症状を呈して死に至る“気腫疽菌”が検出された」と発表した。（2月） 人への感染報告は国内初</li> <li>* 日豪FTA交渉開始（4月）</li> <li>* 第9回全国和牛能力共進会（最終比較審査）が米子市で開催され、全国から約500頭の選抜牛が出品された。</li> </ul>
-------------------	--	--

平成  
19年

- 防げたことから、国が補償する損害額の8割の残り2割を県費で補填した。
- \* 高梁市の養鶏場での鳥インフルエンザ発生に際しての迅速な対応に対して、石井知事や生産者代表ら6名から県畜産課に謝意があった。(2月27日)
  - \* 生乳のポジティブリスト制度に対応してチェックシートの記録を開始(4月1日)
  - \* 松崎牧場(岡山市松新町)が加工乳製品の製造販売を開始(4月1日)  
投資額:約3千万円
  - \* 鈴木茂男氏(岡山県養蜂組合連合会長)が叙勲(旭日双光章)(4月)
  - \* 長綱元昭氏(元蒜山酪農農業協同組合長)が黄綬褒章を受章(4月)
  - \* 吉原輝夫氏(装蹄師協会会長)が黄綬褒章を受章(4月)
  - \* 畜産センターの「平鶴」号が基幹種雄牛に認定
  - \* 第9回全国和牛能力共進会鳥取大会に岡山県からは種牛10頭、肉牛8頭を出品し、総合成績では宮崎、鹿児島、大分、岐阜に次いで第5位と輝かしい成績を収めた。
  - \* 畜産協会が県の助成で「肉用牛入門講座」を開設(9月2日)  
酪農など異業種からの転入や退職者など12名が受講し、基礎講座や牧場体験を積んだ後、年度末に終了した。
  - \* 日本畜産学会第108回大会が岡山大学で開催され、畜産センター職員や吉田全作氏らが発表した。(9月26~27日)
  - \* 県内JAグループが県産米と牛乳の消費拡大に向けた街頭宣伝を実施(12月11日)  
米価の下落や配合飼料価格の値上がりで厳しい農家の実態を訴える初めての取り組みで、農協中央会、全農県本部、県内農協、畜産協会の代表など45名が参加した。

(10月11日~14日)

- \* 乳業界大手の明治乳業と森永乳業と雪印乳業が20年3月或いは4月からの市販牛乳値上げ方針を発表  
昭和53年以来30年ぶりで、生乳や紙パックなど原料価格アップに対応(12月~2月)
- \* 賞味期限や産地など食品の偽装表示事件が多発(船場吉兆、伊勢の赤福、白い恋人、ミートホープなど)
- \* 中央競馬に端を発した馬インフルエンザ(H1N1)が流行し、秋田県で開催の第63回国民体育大会の馬術競技で出場馬20頭に陽性反応が検出され、10月8~9日の競技を残して史上初の中止となった。
- \* 全国で3頭のBSEを確認



<p>平成 19年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 県と市町村が「高病原性鳥インフルエンザ発生時の防疫対策に係る協定」を締結 (12月17日) 発生時の蔓延防止に向けて、関連法や指針に基づいて実施する防疫対策への相互協力を内容として石井知事、井手市長会長、重森町村会長が県庁にて調印した。</li> <li>* 農済は「農業災害補償制度60周年記念岡山大会」を開催</li> <li>* 農済は、津山と勝英の各家畜診療所を統合して北部基幹家畜診療所とした。</li> <li>* 農済は、岡山中部、岡山南部、岡山西南、岡山西部の各家畜診療所をそれぞれ中部、南部、西南、西部家畜診療所と名称変更した。</li> </ul>	
-------------------	---	--

<p>平成 20年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 乳価が30年ぶりに値上げ 飲用向けは4月から3円/kg、翌年3月からは10円/kgの値上げとなる</li> <li>* 県内大手のオハヨー乳業が市販の希望小売価格値上げを発表 (2月13日) ヨーグルトなどの加工品は3月、牛乳は4月から 値上げしない乳製品についても容量を減らし実質的に8~10%程度の値上げとなった。</li> <li>* 農済は、診療課を廃止して家畜課に統合、中部家畜診療所と臨床研修所を統合して生産獣医療支援センターに、西南家畜診療所を西部基幹家畜診療所に、阿新支所を新見支所と名所変更した。</li> <li>* 岡山和牛推奨子牛(おかやま四つ☆子牛)の認定基準作成に向けて、子牛市場調査や枝肉成績との関連などの分析を開始した。(4月)</li> <li>* 県畜産課と畜産協会を中心に酪農経営支援チームを結成 (5月19日)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 明治乳業が市販牛乳に続き生クリーム、バターなどの値上げを発表 (2月6日) 牛乳・生クリーム：4月から バター、チーズ：5月から</li> <li>* 「第1回全国ブランド牛交流会」が新見市の「まなび広場にいみ」で開催 (10月31日) 広島牛、白老牛、米沢牛、上州牛、三田牛、宮崎牛、千屋牛などの関係者100名が参加 石破農水大臣に対する新見石垣市長のブランド牛支援要請を受け、中央畜産会などが開催した。</li> <li>* 配合飼料価格が高騰し、平成の危機と言われた。</li> <li>* 倉敷チボリ公園閉園</li> <li>* 国は酪農関連対策を次々と実施</li> <li>* 国内で35頭目のBSEを確認 (3月)</li> </ul>
-------------------	---	---

平成 20年	<p>おか酪、農済、畜産センター、家保、県民局、酪大と一体となって厳しい経営環境下での支援強化活動を開始した。</p> <p>* 県、全農、農協、農済、畜産協会などが岡山和牛子牛資質向上対策協議会を設立し、「おかやま四ッ☆子牛」の名称と認定基準を定め、9月から認定を始めた。 (9月)</p> <p>&lt;四ッ☆子牛の認定基準&gt; 出荷日齢：雌 225～285日齢 去勢 215～275日齢 体高と胸囲：登録協会発育基準の1σ以上 腹囲と胸囲の差：22cm以上 過肥でなく著しい瑕疵、損徴がないこと</p> <p>* 「ミルク&amp;ナチュラルチーズフェア2008 in おかやま」 (10月15～16日) 県産牛乳や乳製品の消費拡大を目的に、おかやま酪農協及び県酪農乳業協会が岡山ドームで開催した。併せて「牛乳大好き！絵画コンクール」の表彰、展示を行った。</p>	
-----------	---	--

平成 21年	<p>* 美作地域の牛にボツリヌス症が続発 (1月) カラスの糞に起因した可能性が大で牛舎消毒とワクチン投与で終息</p> <p>* 県は家保による受精卵移植の技術提供を有料化 (4月1日) 有料化の背景：民間が参入しやすい環境づくり、ETに対する農家の経済意識向上、安定的な技術提供</p> <p>* 吉原直樹氏（美咲町の酪農家）が家畜人工授精優良技術発表全国大会で西川賞を受賞 (2月13日)</p> <p>* 畜産センターの「新糸藤」号が基幹種雄牛に認定</p> <p>* 畜産センターが家畜改良事業団との共同検定を開始 (4月)</p>	<p>* 岡山市が政令指定都市に移行</p> <p>* 自民党から民主党に政権交代</p> <p>* 鳥インフルエンザが愛知県のウズラ7羽に発生（H7N6 亜型低病原性）</p> <p>* 新型インフルエンザの世界的流行 4月14日：米国疾病対策センターは、カリフォルニア州の少年が豚インフルエンザに感染したと発表 4月30日：世界保健機構（WHO）が新型の豚インフルエンザをインフルエンザAと呼称変更 日本国内では、新型インフルエンザと報道されたが、その後は季節性インフルエンザとされた。 国内で13万人が感染し、127人が死亡（H1N1型）</p>
-----------	--	--

<p>平成 21年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 畜産協会が国土交通省河川事務所と連携して県事業で河川敷野草を活用した給与実証を開始した。</li> <li>* 山崎博文氏(おかやま酪農業協同組合長)が藍綬褒章を受章 (4月)</li> <li>* 永禮淳一氏(津山市の酪農家)が第56回矢野賞を受賞</li> <li>* 松崎隆氏(岡山市の酪農家)が全国優良畜産経営管理技術発表会で最優秀賞の農林水産大臣賞を受賞 (11月2日)</li> <li>* 千葉靖代氏(おかやま酪農業協同組合代表理事組合長)が黄綬褒章を受章 (11月16日)</li> <li>* 樋口由美子氏(真庭市の酪農家)が毎日農業記録賞最優秀賞・農林水産大臣賞を受賞 (11月)</li> <li>* 生乳検査の広域化により、畜産協会は中販連から広島県を除く地域の生乳検査を受託</li> <li>* (株)岡山県食肉センターがISO-HACCPの認証を取得</li> </ul>	
-------------------	--	--

<p>平成 22年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 蒜酪はジャージー乳製品(ヨーグルト)の香港輸出を開始 21年度 輸出額: 186千円</li> <li>* 岡山県の農林水産関係試験研究機関の再編統合により、従来の畜産センターは農林水産総合センター畜産研究所となった。 (4月1日)</li> <li>* 生乳検査が生乳販連単位で広域化され、畜産協会が中国5県の検査を開始 生乳販連の事務所が広島市から岡山市に移転し、乳代及び販売経費は地域内での完全プール化となった。 (4月1日)</li> <li>* 宮崎県の防疫活動に岡山県からも獣医師など20名を派遣 県から17名、農済から植月義友家畜課長</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 宮崎県で口蹄疫が大発生 (4月) 初発の都農町で4月5日に異常牛が出たが、陽性確認が4月20日になされるなど初動体制が遅れた。県の非常事態宣言のもとで全国からの技術者派遣も得て移動制限区域内のワクチン接種及び殺処分も含めて終息に向けた防疫活動がなされた。 発生農場292戸 211,608頭 殺処分297,808頭 豚: 227,949頭 牛: 69,454頭 その他: 405頭</li> <li>* 北海道で開催予定の第13回全日本ホルスタイン共進会、第5回全日本ジャー</li> </ul>
-------------------	--	---

<p>平成 22年</p>	<p>など3名、畜産協会から岡田耕平審議役 派遣期間：5月1日～7月7日 (活動延べ日数：140日)</p> <p>*宮崎県の口蹄疫発生対策として県の種雄牛を分散飼育とした。 (6月4日～9月1日) 赤磐市の農林水産総合センターに5頭移動</p> <p>*畜産研究所の「西乃糸藤」「新初英」号が基幹種雄牛に認定</p> <p>*畜産研究所、鳥根県畜産技術センター及び㈱ワコムアイティの共同研究で開発した3軸方向センサーを用いた牛の分娩・発情探知システム「喜多佳」の販売を開始した。</p> <p>*畜産協会の生乳検査センターが精度管理認証施設に認定 日本酪農乳業協会及び日本乳業技術協会の審査を経て認証取得 (10月1日)</p> <p>*酪農後継者の安富照人氏(岡山市)、山中誠氏(笠岡市)の2名が第57回矢野賞を受賞 (10月22日)</p> <p>*「国民文化祭おかやま2010」開催 「あっ晴れ!おかやま国文祭」と題した総合グラウンド内の催しで「岡山県産食肉祭り」「ミルクフェア」を開催した。 (11月6～7日)</p> <p>*山上恭宏氏(㈱福田種鶏場社長)が叙勲(旭日単光章) (11月10日)</p> <p>*松崎隆・まり子夫妻(岡山市の酪農家)が天皇杯を受賞 (11月23日) 混住化が進む東区松新町での自給飼料確保とエコフィールドの活用、適正な堆肥処理と健康な牛づくりなど六次化を取り入れた酪農経営が評価された。</p> <p>*㈱福田種鶏場の社長に、山上祐一郎氏が就任</p>	<p>ジー共進会が延期</p> <p>*韓国で口蹄疫が続発 翌年までに牛15万頭、豚332万頭を殺処分</p> <p>*韓国で高病原性鳥インフルエンザも続発 171の農場で約378万羽を殺処分</p> <p>*国内でも高病原性鳥インフルエンザが続発 11月～23年3月までに鳥根県安来市や千葉市など関東以西の9県24農場で183万羽を殺処分した。</p>
-------------------	--	---

<p>平成 23年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* (社)岡山県畜産公社の精算が終了し、債権放棄額は約4億円となった。(3月)</li> <li>* 岡山県養豚振興協会が食肉市場で40回豚枝肉共進会を開催(10月19日) 8農場から29組(58頭)が出品された。</li> <li>* 石岡史好氏(津山市の肉用牛農家)が第58回矢野賞を受賞</li> <li>* 県内でアカバネ病の生後感染がワクチン未接種牛3頭に確認された。(10月中旬)</li> <li>* 鳥インフルエンザの防疫演習を開催 家保、市町村、農協、自衛隊、近隣県などから約200名が参加し、初動確認、殺処分、農場消毒などの作業手順確認や防護服の着脱訓練を行った。</li> <li>* 真庭市の蒜山農業公社が汎用型粗飼料収穫機を導入し、飼料用稲・トウモロコシのWCS(ホールクロップサイレージ)の取り組みを開始した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 日本が口蹄疫清浄国に復帰(2月5日)</li> <li>* 東日本大震災が発生(3月11日) マグニチュード9.0 10mを超える津波で2万人以上の死者 福島第一原子力発電所の炉心融解と建屋爆発で放射線が飛散し多くの人が避難した。</li> <li>* 延期されていた第13回全日本ホルスタイン共進会、第5回全日本ジャージー共進会は中止された。</li> <li>* 鶏卵生産者経営安定対策事業(鶏卵価格差補填事業及び成鶏更新・空舎延長事業)を施行(4月) 昭和40年代前半から、農協系と商系の基金協会で実施されていた鶏卵価格差補填事業が日本養鶏協会を実施主体に行われることとなった。</li> <li>* 口蹄疫や高病原性鳥インフルエンザの国内大発生を受けて、家畜伝染病予防法の大改正があり、飼養衛生管理基準が大幅に見直された。</li> <li>* 安愚楽牧場が約4,330億円の負債を抱えて経営破綻した。</li> </ul>
-------------------	---	---

<p>平成 24年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 畜産研究所に搾乳ロボット牛舎が完成(3月)</li> <li>* 食肉市場開設50周年記念式典を開催(3月23日)</li> <li>* 農済は真庭家畜診療所蒜山支所を新たに建て替え、蒜山家畜診療所と名称も改めた。</li> <li>* 畜産研究所の「おかやま地どり」素雛供給事業が民間移譲され、新たにおかやま地どり振興会が供給事業を開始した。(4月1日)</li> <li>* おか酪は、津山鶴山ホテルで創立10周年</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 行財政改革で県は現業職を廃止(3月31日)</li> <li>* 肥料取締法の一部改正で、混合肥料複合肥料を新設(9月)</li> <li>* 第10回全国和牛能力共進会(最終比較審査)が佐世保市で開催され全国から480頭の選抜牛が出品された。(10月25~29日)</li> <li>* 鶏卵生産者経営安定対策事業に係る事業を日本養鶏協会を存続団体として、二つの基金団体(全国基金、全日本基金)を統合(12月3日)</li> </ul>
-------------------	---	--

平成  
24年

- 記念式典を開催  
国会議員外530名出席 (4月17日)
- \* 岡山県農地開発公社の解散を受け、畜産協会を畜産公共事業の実施主体として家畜排泄物処理施設ストックマネジメント事業で奈義町堆肥処理施設の改修工事を実施した。(25年1月竣工)
  - \* 牛枝肉のセシウム検査を開始(9月3日)
  - \* 岡山県の畜産協会、衛指協、養鶏協会など多くの組織の長として畜産に多大なご貢献を頂いた恩人である池田隆政様のご逝去。(7月21日)  
後日、岡山国際ホテルで厳かに開催されたお別れの会には県内外から約1千人の参列があった。(9月6日)  
正五位旭日日中綬章を死亡叙勲
  - \* 畜産研究所の「北盛栄」「美盛光」号が基幹種雄牛に認定
  - \* 井原市食肉センター廃止 (10月末)
  - \* 第10回全国和牛能力共進会長崎大会に、県産種雄牛「新初英」の産子12頭を含む27頭を出品した。総合成績は全国第6位総合評価群の肉牛の部では宮崎県に次ぐ第2位と優れた成績を収めた。  
新見高校生徒による「碁盤乗り」は、調教技術の素晴らしさで会場に感動を与えた。
  - \* 藤井晋氏(元岡山県獣医師会長)が叙勲(旭日双光章) (11月9日)
  - \* (有)安富牧場(岡山市の酪農家)が農林漁業近代化表彰を受賞 (11月11日)
  - \* 本松允之氏(岡山県食肉荷受株式会社社長、元岡山県畜産協会会長)が黄綬褒章を受章 (11月13日)
  - \* 国土交通省岡山河川事務所が堤防除草で発生する刈草の無償提供を開始  
(5月中旬～11月上旬)  
吉井川、旭川、高梁川の河川施設130ha

平成 24年	分をバラ及びロール状態提供 * 県が口蹄疫防疫演習を開催（11月20日） 吉備中央町で農政局、自衛隊及び県内畜産機関などから230余名の参加を得て開催された。	
-----------	---	--

平成 25年	*(有)哲多和牛牧場が全国優良畜産経営管理技術発表会で農林水産大臣賞を受賞（3月6日） * 畜産女性の県外交流会を畜産協会が総社市で開催（3月21日） 中四国の47名が参加した。 * おかやま地どり振興会による「おかやま地どり」素雛供給事業を休止（3月31日） * おか酪が体細胞数30万/ml以下の適合乳率向上に向けて乳質向上対策実施要領を改正（4月1日） * 蒜酪婦人部50周年大会（5月10日） * J Aグループが表町商店街でT P P参加反対パレード（6月15日） * 畜産研究所の「美咲鶴」号が基幹種雄牛に認定 * 畜産研究所はI T技術を用いた、牛の体表面温度を継続的に測定できる「牛体温出力装置」の特許権を取得（7月19日） * 知事・県議会議長に対して岡山J AグループからのT P P参加反対要請（9月9日） * (有)日笠農産（津山市の養豚）が農林漁業近代化表彰を受賞（10月20日） * 高病原性鳥インフルエンザ防疫演習を開催 県畜産関係者、農政局、自衛隊、農家、関係団体など329名が参加した。 （11月14日）	* 広島県福山市営競馬場が3月24日の最終レースで63年の歴史に幕を下ろした。 * T P P（環太平洋経済連携協定）参加反対全国集会（日比谷野外音楽堂）（3月12日） * T P P国会決議の実現を求める全国集会（日比谷野外音楽堂）（12月3日） * 飼料原料原産国の干ばつ、為替の変動（急激な円安）により輸入穀物が高騰し配合飼料価格が過去最高（67,900円/kg）を記録したことを受け、国の「配合飼料価格安定制度」の抜本の見直しにより価格差補てん金の発動基準が変更された。
-----------	--	--

<p>平成 26年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 蒜酪がアジア最大級の「食」の展示会 FOODEX JAPAN2014のヨーグルト グランプリで金賞を受賞 (3月7日)</li> <li>* 酪大農場HACCP推進農場に指定 (3月28日) 同校は畜産協会などの支援で、平成24年 から農場HACCP認証取得を目指して いた。</li> <li>* 県内で豚流行性下痢が発生 (3月13日)</li> <li>* 飼料安全法に基づき昭和51年度開始の流 通飼料等安全性確保推進事業の飼料検査 機関が岡山家保から畜産研究所に移行し た。 (4月1日)</li> <li>* 県内で8年ぶりに日本みつばちに腐そ病 が発生した。 (6、9月)</li> <li>* 「おかやま和牛肉」が商標登録(7月11日)</li> <li>* 上森亨・叔恵夫妻(高梁市の酪農家)が 日本草地畜産種子協会主催の第1回全国 自給飼料生産コンクールで会長賞を受賞 (7月18日)</li> <li>* 畜産研究所の「義勝成」が基幹種雄牛に 認定</li> <li>* (有)まつだ牧場(岡山市の酪農業)が県農 林漁業近代化表彰を受賞 (10月23日)</li> <li>* アルム株式会社(赤磐市の採卵業)が全 国優良畜産経営管理技術発表会で最優秀 に輝き、農林水産大臣賞を受賞した。 (11月14日)</li> <li>* 畜産研究所はメタン発酵処理のろ液など からリンの除去技術を開発</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* カナダ、米国で高病原性鳥インフルエ ンザが大発生し、15州231農場で4,800 万羽の殺処分が行われた。 (12月～27年6月)</li> <li>* 豚流行性下痢が全国的に蔓延</li> </ul>
-------------------	---	--



<p>平成 27年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 笠岡市の採卵鶏の大規模農場で鳥インフルエンザが発生 (1月15日) <ul style="list-style-type: none"> <li>・飼養羽数</li> <li>発生農場：199千羽</li> <li>移動制限区域 (3km以内)：267千羽</li> <li>搬出制限区域 (10km以内)：718千羽</li> <li>・防疫対応人員：延べ約85百人</li> </ul> </li> <li>県はまん延と再発防止対策に約4億1千万円、関係農場への損失補填に約1千1百万円を緊急措置し、あわせて関係農場の経営再会・継続・維持などの制度資金金利を融資機関と協力して無利子とした。</li> <li>* 県と酪農乳業協会の認定で県産生乳100%使用した「晴れの国おかやま牛乳」の製造販売をオハヨー乳業(株)が開始した。 (6月2日)</li> <li>* 和子牛の生産減で7月の市場売買価格が雌、去勢共に60万円を超えた。</li> <li>* 畜産研究所の「藤沢茂」号が基幹種雄牛に認定 <ul style="list-style-type: none"> <li>県と家畜改良事業団の共同検定牛であり、事業団の検定成績も優れていたため、28年度から本牛の精液は事業団を通じて全国供給されることとなった。</li> </ul> </li> <li>* 藤原完治氏 (高梁市の酪農家) が第62回矢野賞を受賞。 (10月22日)</li> <li>* 第14回全日本ホルスタイン共進会で北海道に次ぐ優秀な成績を収めた。 <ul style="list-style-type: none"> <li>岡山県から21頭出品(ホルスタイン13頭、ジャージー牛8頭)</li> <li>ジャージー種経産牛の部で真庭市の筒井大悟氏が名誉賞、ホルスタイン種の第11</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 日本獣医師会獣医学術学会年次大会が岡山市で開催 (2月13~15日) <ul style="list-style-type: none"> <li>会場：岡山コンベンションセンター</li> <li>全日空ホテル</li> </ul> </li> <li>* 10月5日、米国アトランタで開かれていたT P P閣僚会合にて、交渉開始から5年半、日本の参加から2年強を経て大筋合意に至った。</li> <li>* 宮崎県の口蹄疫、東北震災による放射能汚染などの影響で和子牛生産が減少し、全国的に和子牛、枝肉の価格が高騰した。</li> <li>* 獣医学術中国地区学会が岡山市で開催 (10月10~11日) <ul style="list-style-type: none"> <li>会場：岡山コンベンションセンター</li> </ul> </li> <li>* 第14回全日本ホルスタイン共進会が10年ぶりに開催 (10月23~26日) <ul style="list-style-type: none"> <li>会場：北海道勇払郡安平町</li> <li>出品：42都道府県から374頭 <ul style="list-style-type: none"> <li>(ホルスタイン344頭</li> <li>ジャージー牛 30頭)</li> </ul> </li> <li>ホルスタイン最高位賞は北海道の天野洋一氏</li> </ul> </li> <li>* 第21回気候変動枠組条約締約国会議(C O P 21) 開催 (11月30日~12月12日) <ul style="list-style-type: none"> <li>2020年失効の京都議定書の新たな枠組みで、196カ国が参加してパリ協定を採択した。</li> </ul> </li> </ul>
-------------------	---	--

平成  
27年

部で岡山市の妹尾始氏が優等2席のセカンドベストアダーを獲得。

21頭中、18頭が1等以上で入賞率は86%で改良の高さを全国にアピールした。

リードマンコンテストでは高松農業高校の生徒がチャンピオンを獲得した。

- \*アグリアシストシステム(株) (津山市、石原聖康代表) 及び(有)カーライフフジサワ (岡山市、藤澤輝久代表) が共に稲WCSなどの自給飼料生産の作業受託の取り組みが評価されて農林漁業近代化表彰及び農林水産大臣賞を受賞した。

(10月27日)

- \*(株)竹信牧場 (笠岡市の酪農業) が全国優良畜産経営管理技術発表会で農林水産大臣賞を受賞

(11月12日)

- \*酪大が創立50周年記念式典を開催

(11月13日)

3月に学生寮が完成

- \*和牛肥育技術レベルが著しく向上

12月開催の県枝肉共進会成績は出品牛50頭の内、肉質等級4及び5の割合(上物率)が98%であった。

花房芳視氏(奈義町)の出品牛3頭全ての脂肪交雑(BMS)が最高値の12と驚異的な結果となった。

- \*農業共済制度が改正され、と畜場で白血病と診断されての全廃棄は共済対象となった。

- \*畜産研究所は岡山大学と共同で燃料電池SOFCを開発

<p>平成 28年</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* 井笠家保管内の牛肥育農場及び乳牛育成農場で牛ボツリヌス症が発生 (3月) 死産頭数：60頭</li> <li>* 食肉市場関係団体及び県などで「岡山F1販売促進協議会」を設立し、交雑牛の販売促進活動を開始 (5月18日) ブランド名：清麻呂 (12月22日商標登録)</li> <li>* 「おかやま和牛肉」のサブブランドである「岡山つる牛」の首都圏売り込みを目的に東京で「岡山つる牛キックオフ大会」開催 (3月8日) 会場：メトロポリタンエドモンド(飯田橋)</li> <li>* 県議会は政府の規制改革会議による酪農指定団体制度の大幅改革・見直し案に対し、「制度の存続及び機能強化を求める意見書」提出した。 (9月29日) 提出先：総理大臣、衆参院議長、 関係大臣</li> <li>* 県は高病原性鳥インフルエンザ防疫演習を開催 (10月31日) 関係機関及び団体などへの初動時の情報伝達や協力要請の実動訓練に県及び現地対策本部の構成員、自衛隊、市町村、関係団体など157名が参加した。</li> <li>* 井笠家保管内で61年ぶりに豚の日本脳炎が発生</li> <li>* 畜産研究所の「黒金糸藤」号が基幹種雄牛に認定</li> <li>* 畜産研究所は農業研究所と共同で、夏まきキャベツ用混合堆肥複合肥料を試作し、肥料登録した。</li> <li>* 畜産研究所は家畜排せつ物処理過程における温室効果ガス排出削減技術を開発</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>* T T P 離脱を表明していたトランプ氏が大統領選で勝利</li> </ul>
-------------------	---	--

## 岡山県歴代畜産主任官及び畜産課長

畜産主任官	秋 山 直 三	明治28年4月～明治41年5月
〃	谷 口 助 之 進	明治41年5月～明治42年6月
〃	河 瀬 盤 次 郎	明治42年6月～大正2年3月
〃	綱 島 助 次 郎	大正2年4月～大正12年4月
〃	大 西 季 彰	大正12年4月～昭和5年4月
〃	片 山 省 三	昭和5年4月～昭和14年
〃	中 島 周 蔵	昭和14年 ～昭和15年3月
畜産課長	中 島 周 蔵	昭和15年4月～昭和18年4月
〃	武 田 朝 男	昭和18年5月～昭和21年12月
〃	押 野 芳 夫	昭和22年1月～応和24年11月
〃	惣 津 律 士	昭和24年11月～昭和35年4月
〃	蔵 知 毅	昭和35年4月～昭和38年5月
〃	出 口 孝 吉	昭和38年5月～昭和43年3月
〃	橋 本 精	昭和43年4月～昭和47年3月
〃	渡 邊 明 喜	昭和47年4月～昭和53年3月
〃	三 村 剛	昭和53年4月～昭和57年3月
〃	岩 井 敏 一	昭和57年4月～昭和60年3月
〃	堤 兼 利	昭和60年4月～平成5年3月
〃	奥 一 郎	平成5年4月～平成6年3月
〃	内 藤 照 章	平成6年4月～平成8年3月
〃	磯 山 旭 輝	平成8年4月～平成10年3月
〃	有 富 敬 典	平成10年4月～平成12年3月
〃	樋 口 義 男	平成12年4月～平成14年3月
〃	上 原 逸 史	平成14年4月～平成17年3月
〃	金 山 聖	平成17年4月～平成19年3月
〃	柴 田 範 彦	平成19年4月～平成21年3月
〃	斉 木 孝	平成21年4月～平成24年3月
〃	若 田 茂	平成24年4月～平成26年3月
〃	中 塚 陽 二 郎	平成26年4月～平成29年3月

## 岡山県畜産年表編集委員名簿

岡山県農林水産部畜産課	総括参事	津 寺 春 良
県農林水産総合センター畜産研究所	副 所 長	馬 場 誠
全国農業協同組合連合会県本部	畜産部長	川 崎 敦 史
おかやま酪農業協同組合	参 事	笹 野 英 明
岡山県農業共済組合連合会	家畜部長	植 月 義 友
県配合飼料価格安定基金協会	常務理事	居 森 一 憲
岡山県獣医師会	常務理事	加 藤 信 介
岡山県養鶏協会	事務局長	出 宮 清 次
岡山県畜産協会	専務理事	柴 田 範 彦

### 岡山県畜産年表

平成29年 3月発行

発行人 樋口 義 男

発行所 一般社団法人 岡山県畜産協会

〒700-0826

岡山市北区磨屋町9-18 岡山県農業会館5階

TEL 086-222-8575

印刷所 株式会社 創 文 社